

ヒンドゥー・ナショナリズムとインド像

目次

1. 序論

- 1-1. 問題意識
- 1-2. 研究対象
- 1-3. 研究手法
- 1-4. 先行研究
- 1-5. リサーチクエスチョン
- 1-6. 研究の意義と限界

2. 対立のインド史

- 2-1. ヒンドゥー・ナショナリズム
- 2-2. コミュナリズム
- 2-3. インド・パキスタン紛争
- 2-4. バーブリー・マスジッド破壊事件
- 2-5. 牡牛屠殺問題
- 2-6. バンデマタラム論争

3. RSS のひとびとのインド像

- 3-1. RSS
- 3-2. RSS デリー事務所のマネージャー
- 3-3. RSS デリー事務所のメンバー

4. 在日インド人のインド像

- 4-1. インド人コミュニティの幹部
- 4-2. 在日エリート
- 4-3. インド・ムスリム

5. 結論

- 5-1. 「India」と「Hindustan」の交錯とそれぞれのインド像
- 5-2. 多文化・多宗教「インド」への道

6. 参考文献

1. 序論

1-1. 問題意識

本研究は、世俗国家インドが抱えるヒンドゥー・ナショナリズム問題を中心に、インドのひとびとが抱くインド像を分析するものである。インドという国は、約 3300000 平方キロメートル（パキスタン、中国との係争地を含む）の広大な土地に、約 10 億 3000 万人の人口を持ち、ヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教、シク教、仏教といった多様な宗教が共存する国である¹。多様な宗教や文化を内包していることが、どれだけ大きな問題を生みえるか、「6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字」²といわれた旧ユーゴスラビアの紛争や、アメリカでの人種差別問題など、世界を見渡せば、想像に容易い。インドは、独立以来約 60 年間、世界最大の民主主義国家を自認し、世俗主義のもとで国民を治めてきた。しかし、宗教の違いによる対立（コミュニナリズム）はやむことはなく、ヒンドゥー・ナショナリズムを提唱する BJP（Bharatiya Janata Party：インド人民党）が政権を握る³という衝撃的な出来事も起こった。経済新興国として注目を集め、大国としての地位を固めつつあるいま、このようなインドが抱える問題を解決するのだろうか。

1-2. 研究対象

1947 年のインド・パキスタン分離独立以降のインド国内外のコミュニナリズム問題を考察し、1980 年代以降のヒンドゥー・ナショナリズム運動台頭の背景を分析する。その上で、ヒンドゥー・ナショナリズム運動の主役である RSS（Rashtriya Swayamsevak Sangh：民族奉仕団）と在日インド人のインド像を調査する。特に、さまざまな歴史的背景から生まれる、世俗国家「インド=India」と文化圏としての「インド=Hindustan」がひとびとの中でどのように区別または混同されているかに着目する。

1-3. 研究手法

コミュニナリズム問題については文献調査を行い、分析する。RSS のメンバーと在日インド人のインド像については、筆者が独自に行うインタビュー調査を中心に分析を行う。

1-4. 先行研究

ヒンドゥー・ナショナリズム論については、トーマス・B・ハンセンやクリストファー・ジャフェローの著書が代表的なものとして挙げられる。ハンセンらは、植民地時代から現

¹ 外務省 HP インド基礎データ

² 月村 1994

³ インドでは独立以来（1977 年にジャナタ党に敗れたのを除いて）、国民会議派（Indian National Congress）が政権についていたが、汚職や癒着で国民の信頼を損ない、1998 年に BJP のバジパーイ政権が誕生した。2004 年以来、再び国民会議派が政権を握っている。

代までのヒンドゥー・ナショナリズムの歴史的な変遷を、政治学的視座からのみならず、さまざまなアクターの立場から分析している。中島岳志は、前述の論者の議論を受け継ぎつつ、文化人類学的な手法によって宗教ナショナリズムを支持する民衆のエージェンシーを調査している。宗教ナショナリズムが必ずしも道具主義的、作為的なものではないとした上で、ヒンドゥー・ナショナリズム運動に参加しているひとびとの個人的な思想や動機を分析するという中島の研究手法は、問題の深層を浮き彫りにするために非常に重要な視座を提供する。

1-5. リサーチクエスション

ヒンドゥー・ナショナリズム運動が台頭する背景には、ネイション（国民国家）としての「インド=India」と宗教や生活を内包するヒンドゥー文化圏としての「インド=Hindustan」の混合があるのではないか。そのために、世俗主義が浸透せず、ヒンドゥー・ナショナリズムが、過激なヒンドゥー至上主義者のみならず、ヒンドゥー一般を対象として拡大するのではないか。

ヒンドゥー・ナショナリズム団体のイデオログやヒンドゥー至上主義者の一部は、政治的な意図をもって「ヒンドゥー」をナショナル・アイデンティティに掲げている。かれらはインド・ムスリムなどのマイノリティに対する排他的な姿勢を強く打ち出しており、それによって生み出される暴動や事件が、ヒンドゥー・ナショナリズム運動としてインド国内外の注目を集めている。しかし、筆者は、そのような一部の過激な主張が、ある程度の共感をもってインド国民に受け入れられる土壌に着目する。歴史的に広範な影響力を有してきたヒンドゥー文化圏としての「Hindustan」と近代に誕生したネイションとしての「India」との結びつきが、マイノリティに対して寛容性を欠いた社会を生み出しているのではないか。宗教的な寛容性をしばしば自負するマジョリティとしての一般のヒンドゥーのひとびとが持つインド像が、ヒンドゥー・ナショナリズム運動を台頭させる土壌になっているのではないか。

1-6. 研究の意義と限界

本研究は、政治学的な分析が多い従来のヒンドゥー・ナショナリズム運動の研究ではなく、宗教と文化としてのヒンドゥーとインド国民の関係性という新たな視点で分析するという点で、ヒンドゥー・ナショナリズム論およびインド社会に示唆を与えるものだと考える。限界としては、インタビュー調査は特定された少数に対して行われるため一般論化が困難なこと、民衆のエージェンシーを分析するにいたる膨大なアンケート調査など人類学的方法が取れないことが挙げられる。

2. 対立のインド史

2-1. ヒンドゥー・ナショナリズム

ヒンドゥー・ナショナリズム運動は、近年⁴インドで憂慮されている社会的/政治的問題のひとつである。イデオログによってその主張の内容はさまざまだが、インド国内におけるヒンドゥー教の影響を強めることを目的にしていることでは一致している。その背景として、研究者の間では主に以下の3点が挙げられる。

1点目は、世俗国家インドの歪みである。1947年のイギリス植民地支配からの独立以来、インドは世俗主義を国家理念としている。世俗主義は、ヨーロッパにおいて、キリスト教の影響力が政治面に強くなったことの反省から、宗教の政治への介入を回避する目的で生まれた。日本では一般に、政教分離原則によって説明される。しかしインドにおける世俗主義は、日本のそれとは異なる性質を持つ。インドでは、人口の約80%をヒンドゥーが占め、残りの20%をムスリム、キリスト教徒、シク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒が分け合う⁵。これらの宗教マイノリティや低カースト、不可触民、その他の少数民族⁶の権利保障や地位向上のために、政府が積極的に政策をとっているという特徴がある⁷。それに対して、国内の圧倒的マジョリティであるヒンドゥーが不満を唱え、一部の過激なヒンドゥーによってときに暴動にまで発展する場合がある。

2点目は、パーティションの後遺症である。1947年の独立の際、現インドと現パキスタンが分離独立し、パキスタン領に住むヒンドゥー、インド領に住むムスリムが国境を越え、大移動するという混乱状態が起こった。それにともない各地でヒンドゥー・ムスリム間の、略奪、殺戮、拉致、強姦などの事件が多数発生した。そのような過去から生まれた、対パキスタン、対ムスリム感情が、ヒンドゥー・ナショナリズム運動を生んだ要因のひとつといえる。

3点目は、急激な経済発展にともなう社会の変化である。独立以後、社会主義経済政策をとってきたインドは、1991年、開放経済へと政策を転じた。インドは市場規模も大きく、またIT関連で優秀な技術者を多く輩出したため、ITバブルの波に乗って一躍世界から注目される経済新興国へと生まれ変わった。もともと富者と貧者の格差は大きかったが、開放経済によって中間層が急増し、「欧米のような豊かな生活」がもてはやされた⁸。このような社会の急激な変化の中で、カーストがバラモンであっても、経済力がないばかりに貧しい生活を送ることになった等、現状に不満を持つひとびとが、ヒンドゥー・ナショナリズム運動を支持したとされる。

2-2. コミュナリズム

⁴ アシス・ナンディ、小谷汪之、中島岳志、らの見解では、1980年代以降とされる。

⁵ 2001年の国勢調査では、ヒンドゥー教徒80.5%、イスラーム教徒13.4%、キリスト教徒2.3%、シク教徒1.9%、仏教徒0.8%、ジャイナ教徒0.4%となっている。

⁶ 現在では「指定カースト」「指定部族」という行政用語が用いられる。

⁷ 鷹山 2006.3

⁸ 中島 2006。

コミュニナリズムは、南アジアでは一般に宗派主義または宗教対立と解され、さまざまな文化や宗教が混在するインドにとって非常に深刻な問題である。1947年のインド・パキスタンの分離独立（パーティション）や、その後の三度に渡るパキスタンとの全面戦争、1992年のアヨーディヤーでのバーブリー・マスジッド破壊事件など、コミュニナリズムが原因とされる悲劇が起こるたびに、ヒンドゥーとムスリムの対立の根深さや深刻さが指摘されてきた。

コミュニナリズムを巡る問題は、19世紀末以降、イギリスによる植民地支配下で増幅されていった⁹。現在では、植民地政府の統治によってヒンドゥーとムスリムの宗教的差異が強調され、両者がお互いを異質なものと認識するようになり、植民地政府との関係性によって、お互いを植民地政府に迎合していると批判するようになったことがコミュニナリズムの主因だとする考えが一般的になっている。イギリスによる植民地支配が始まる以前にも、ヒンドゥーとムスリムは対立と共存を繰り返してきた。しかし、今日叫ばれるコミュニナリズム問題は、近藤 2004 で指摘される通り、主にイギリスによる植民地支配下に端を発し、1947年の独立以降、社会問題として大きな意味を持つようになった。

2-3. インド・パキスタン紛争

インド・パキスタン（以下、印パ）間の紛争は1947年の植民地支配からの分離独立以後、今日に至るまで続いているカシミール地方の帰属に関する問題を主に起因とするものである。カシミール地方¹⁰の帰属を巡って、両国は三度に至る全面戦争をし、今日まで交戦やテロを繰り返している。印パ紛争の根本的な要因であるカシミール地方の帰属及びその両立不可能な目標を巡る印パの対立をカシミール問題と呼ぶ。カシミール問題は、領土問題・宗教問題・建国理念等に基づく両立不可能性を含んでおり、分離独立以後の約60年、印パ間には緊張状態が絶えず存在している。パキスタンは1947年にインドから分離独立した。「ムスリムによるムスリムの国家を作る」というインド・ムスリム連盟の理想によって、インドが2つに引き裂かれたという歴史観から、パキスタンに対して反発するひとは少なくない。世界の多くの国は、隣国との間になにかしらの対立関係を持っている。日本も韓国とロシアとの間に領土問題を抱えている。しかし、印パ関係のもつれは、国家同士の対立以上に、ヒンドゥーとムスリムの対立の象徴として捉えられる。ゆえに、パキスタンとの関係がこじれたときに、インド国内のムスリムまでもがその反発の矛先になってしまう場合がある。そして、コミュニナリズムとナショナリズムが絡み合うとき、「ムスリムはインドから出て行け」という発想が生まれるのである。

⁹ 近藤 2004

¹⁰ 国連で認定された印パ間の紛争地としてのカシミール地方は、カシミール渓谷、ジャンムー、ラダク、ギルギット・バルティスターン等諸地方に区分できるが、印パ間の実行管理ライン Line of Control (LOC) よりパキスタン側をアーザード・ジャンムー・カシミール、インド側をジャンムー・カシミール州と呼ぶ。これらをまとめてカシミール地方と呼ぶ。

2-4. バーブリー・マスジッド破壊事件

1992年に起きたアヨーディヤーでのバーブリー・マスジッド破壊事件は、インドのコミュニティナリズム問題の深刻さを顕著に表した事件として国内外で大々的に報じられた。アヨーディヤー (Ayodhya) は、北インドのウッタル・プラデーシュ州にある古都で、叙事詩ラーマヤナに出てくるヒンドゥーの神ヴィシュヌの化身であるラーマ王子の故郷として知られる。バーブリー・マスジッド破壊事件とは、1992年12月、アヨーディヤーにあるバーブリー・マスジッドというモスク (イスラーム寺院) をヒンドゥー・ナショナリスト団体の扇動によって暴徒化したヒンドゥーの若者たちが破壊したという事件である。アヨーディヤーには、もともとラーマを祭ったヒンドゥー寺院があった、というヒンドゥー・ナショナリストの主張により、聖地奪回を大義名分に、モスクの破壊およびムスリムへの暴行が起こった。またムスリムもモスク破壊に対して応戦し、ヒンドゥー・ムスリム間で暴力事件が多数発生し、多くの死者を出した。

2-5. 牝牛屠殺問題

牛 (特に牝牛) は、ヒンドゥーにとって聖なる動物とされている。そのため、ヒンドゥーは牛肉を食べないが、ムスリムは宗教上の問題がないため、牛の屠殺および牛肉を食べることが許されている。ムスリムによる牛の屠殺と、それに対するヒンドゥーの抗議は、長年にわたってコミュニティナリズム問題のひとつとして論議されてきた¹¹。特に、1990年代末以降、牛の屠殺の法的禁止措置の是非を巡って、インド国内でさまざまな論議が活性化している。特に、ヒンドゥー・ナショナリスト団体サング・パリワールの一員であるBJPが政権を握った2004年春までに、牛の屠殺を完全に禁止するための法的施行に向けて、強い働きかけが行われていた。

牛の屠殺は、主にムスリムとヒンドゥーの不可触民によって独立以前から行われてきた。かれらは牛肉や牛皮の加工・流通を担ってきた。現在までも、一部合法的に牛の屠殺は行われ、広域的な物流経済の中で、牛肉と牛皮の売買は行われてきた。しかし、BJPをはじめとするヒンドゥー・ナショナリストたちによって、「インド人」にとって聖なる動物である牛を殺すことは、「インド人」としての自己認識が欠落している、といった主張に摩り替えられ、批判の対象となった。この背景には、イギリスによる植民地支配時代に、牛肉を食べるキリスト教徒と、キリスト教徒が食べるために牛を殺すムスリム、という構図が、ヒンドゥーに批判的に見られるようになったことがあるといえる。「母なる大地」を侵し、「聖なる牛」を食べるキリスト教徒に加担するムスリムは、インドに対する裏切り者と目されたのである。BJPが主張するところの「インド人」としての自己認識の欠落という主張は、「インド人」がヒンドゥー的な文化や価値観を共有しているべきだという不寛容な発想から生まれている。

¹¹ 小谷 1993

2-6. バンデマタラム論争

バンデマタラムは、インドの国民歌として、1950年の憲政議会で制定された。作詞は、ベンガル文学の著名な作家、バンキム・チャンドラ・チャッタジーである。国民会議派政権は、バンデマタラムは、1905年に行われた国民会議派のベナレス大会で国民歌に制定されたとして、2005年から2006年を国民歌制定100周年として大々的にPRした。その一環として、全国の教育機関で国民歌の斉唱が通達された。しかし、このバンデマタラムは反イスラーム的な歌詞を有した歌だとして、ムスリムの識者から斉唱の強制に対して反発が起こった。これに対し、BJPのムクタール・アッバス・ナクビ副総裁は「国民歌への反対は分離主義の考えを反映している」¹²と批判した。

バンデマタラムの歌詞がチャッタジーによって最初に書かれたのは、小説「アナンダの僧院」の中だった。この小説は、1700年代を時代背景に、ムスリムの支配に対して抵抗する少年兵を描いたものである。その後の独立機運高まる時代、バンデマタラムはイギリスの植民地支配に対する抵抗歌として広く知られるようになった。バンデマタラムは「母なる大地」を褒め称える内容であり、アッラーを唯一の神として崇めるムスリムにとっては、その教えに反する内容といえる。BJPによる批判がインドの多くのヒンドゥーの意見を反映しているかは疑問であるが、しかしこの歌が国民歌として制定されているのは事実である。インドの「国民」であるムスリムが、この歌を反イスラーム的だと批判することは、現在においては愛国心のない行為と捉えられかねない。

3. RSSのひとびとのインド像

3-1. RSS

RSS (Rashtriya Swayamsevak Sangh : 民族奉仕団) は、インド国内最大のヒンドゥー・ナショナリスト団体である。RSSはBJP (Bharatiya Janata Party : インド人民党) などと共に、その母体であるサング・パリワール (Sangh Pariwar : サングの家族) を構成しており、その末端組織として活動している。1992年のアヨーディヤでのバーブリー・マスジッド破壊事件で、一躍1980年代以降のヒンドゥー・ナショナリズム運動の高まりを象徴する存在となった。そのため、インド国内外の識者からは、一般に、過激な右翼団体と位置付けられる。RSSのイデオログの主張は基本的に、反パキスタンの、反ムスリム的であり、ヒンドゥー以外のインド国民に対する排他的な態度が見られる¹³。

RSSの歴史は、K・B・ヘードゲーワール (Keshav Baliram Hedgewar) がRSSを設立した1925年から始まった。ヘードゲーワールの本職は医師だったが、イギリスの植民地支配の下、かれは他のエリートと同様にインドの独立を目指し、ヒンドゥーの団結による新

¹² 鷹山 2006

¹³ RSSのイデオログの主張などを政治的な観点から分析したものとして、Hansen and Jaffrelot 1999がある。

しい国家の設立を訴えた。RSS を現在のような強大な組織へと成長させたのは、二代目のゴールワルカル (Golwalkar) である。かれは 1940 年から 33 年間 RSS のリーダーとして積極的にインド各地を回り、ヒンドゥーの団結と意志の向上によって国家をより強固なものにする必要性を説き、ヒンドゥー再起を訴えた。特に、シャーカー (Shakha) を普及させることによって、庶民からエリートまで多くのヒンドゥーを取り入れ、均質で強大な組織を作り上げることに成功した。シャーカーとは、RSS が行っている活動のひとつで、毎日朝夕に公園などに集まり、行進や体操を行ったり、ヒンドゥー教の説法を行ったりするものである。シャーカーには、身体的な訓練によって強靱な肉体を、知的な訓練によって高潔な精神を養おうという意図がある¹⁴。シャーカーの目的は、皆が同じ制服を着て、同じ訓練をすることで、RSS が掲げる理想的なヒンドゥーへと成長することにある。実際にそのような効果がどの程度あるかは、中島 2005 で指摘される通り、議論の余地があるが、いずれにせよ、このシャーカーという活動によって、RSS の構成員は増大した。

RSS は、バーブリー・マスジット破壊事件以降、インド国外ではあまり名前が聞かれることはなくなったが、インド国内での影響力は衰えを見せず、依然としてヒンドゥー至上主義的な主張を発信している。RSS のナショナリストとしての主張は、かれらのホームページに掲載された以下の文章に表れている。

Considerable sections of the so-called academia and the elite even today display a singular lack of national consciousness even after witnessing such horrendous insult to nationhood as partition of the country.

The fact that such a breed continues to exist even after so much historical and recent experience provides the strongest reason det're for intense and continuous propagation of the ideal of nationalism and the recognition of the Hindu national identity as a fundamental fact transcending corroboration and discussion.

Any compromise in this regard is bound to cause peril to hard earned freedom; and without freedom there will be no prospect of progress for all either.

多くの学者やエリートと呼ばれる人々が、独立国家に対するパーティション (国土の分裂) というおぞましい屈辱を経験したにも関わらず、いまだに国民意識の欠如を露呈している。多くの歴史的な経験および昨今の経験が、ナショナリズムの理想と、実証や議論の必要性を超えた根本的な事実としてのヒンドゥー・ナショナル・アイデンティティの真価の、強く継続的な伝承を必要とするという確固たる理由を提示した後にも、このような輩が存在しつづけるという事実。この点で、どのような妥協も、自由を得る上での危険性を孕んでいる。そして自由なくして、すべての進展の可能性はないのである。

(出典 : Rashtriya Swayamsevak Sangh website、和訳 : 筆者)

¹⁴ 中島 2005

“the Hindu national identity as a fundamental fact transcending corroboration and discussion (実証や議論の必要性を超えた根本的な事実としてのヒンドゥー・ナショナル・アイデンティティ)”という言葉からも、RSSが「インド=ヒンドゥー」という偏狭な価値観を強く打ち出していることは明白である。

筆者は2007年9月にデリーにあるRSSの事務所を訪れ、数人のメンバーにインタビューを行った。主としてRSSの出版物などのマネージメントをしている60代の男性D氏、そして60年間RSSのメンバーだという70代の男性E氏に話を聞いた。かれらのカーストについては本人に確認はしていないが、この事務所にいるメンバーはほとんどがバラモンなので、バラモンだと思われる。主な質問は、なぜRSSに入ったのか、パキスタンとの関係、インド・ムスリムとの関係についてである。

3-2. RSS デリー事務所のマネージャー

D氏はもともと会社員として企業に勤めていたが、退職後にRSSの事務所で働くようになった。かれは、数年前に会社が経営不振になり、その関係で退社の時期を早めることを余儀なくされ、転職先としてRSSに所属していた友人に事務所の出版物の管理の仕事を紹介してもらい、働き始めることになった。それ以前からRSSの考えるヒンドゥーの教えを大切にする思想には賛同していた。彼の現在の仕事は、事務所で販売されている本の管理である。事務所には多くのRSS関連の本やキーホルダー、ステッカーなどが商品として陳列されている。その多くは、RSSのヒンドゥー至上主義を強く主張したもので、本はおよそ70%がヒンディー語で、残りは英語で書かれたものだった。

本のひとつに“Paravatam (Home Coming) Why and How”というものがあつた。この本の中でなされる主張は、全てのインド人はそもそもヒンドゥーであり、イスラーム教やキリスト教に「改宗」した者はヒンドゥーに戻るべきだというものである。この本で強く主張されたことは、ヒンドゥー特有の非暴力と寛容の精神で、かれらを異教から救おうということだった。非暴力 (ahimsa) と寛容の精神 (tolerance) を主張することは、ヒンドゥー・ナショナリストの特徴のひとつである。かれらは自らをガンジー主義者とし、異教徒の暴力に対して批判を繰り返す。私はD氏にこの本についてインタビューをした。

—Why do you think all Indians have to be Hindus?

Originally, all Indians are Hindus. They just changed into other religions. In those days, Caste was so strong and people who got oppressed became Muslims or Christians, but now Caste is not strong and people can be back to Hindu society.

—Do you mean “Hindu society” as India?

Yes.

—India is a secular country. Don't you think every religion has right to exist in

India?

Yes, but there is Hindu culture and every religion exists inside it.

—In the book, it says if people want to come back to Hindu, Hindu society welcomes them. What will happen if they do not want to?

They want to, because they are originally Hindus. If they do not want to, their religion is binding them. People can't live without Dharma.

—I think they have something to believe like Dharma in their own religion, too. Don't you think they can live with it?

Islam or Christianity is intolerant. And wars happen.

—Do you mean Islam and Christianity are violent?

Yes, sometimes they are. There are many terrorism and wars.

—What about the Ayodhya case in 1992? That was violence by Hindus.

Not true. That was protecting from Muslims.

—Are you saying they destroyed the mosque for protecting?

Originally, there was a Hindu temple in that place. They broke it down and built the mosque. That's what I call "protecting". Also many Hindus got killed in that case. That was a tragedy and young men who did that have responsibility. That was a very delicate problem.

—I went to Matura¹⁵ few days ago. Do you think Matura is going to be next Ayodhya?

Matura is similar as Ayodhya. There is very important place for Hindu.

—It's Krishna's birth place, right?

Yes.

—Do you think you need to destroy the mosque in there?

I don't say "destroy." We think we need to rebuild Hindu temple.

—Is that without violent way?

Of course. We try to discuss about that without violence.

—You support nonviolence way, I mean *ahimsa* way, right? What do you think about Kashmir problem? There are still some armed conflicts there.

Kashmir problem is over. It's resolved. There is some terrorism by Pakistan but it's resolved for us.

—What about relationship with Pakistan?

We, in the past, have problems but we are getting better relationship.

¹⁵ マトゥーラ (Matura) は、ヒンドゥー教の聖なる河のひとつヤムナ河にあるヒンドゥーの聖地。ヒンドゥーの神クリシュナ生誕の地とされる。アヨーディヤーと同様に、ヒンドゥーの聖地にモスクが建てられており、モスクに隣接するヒンドゥー寺院では、モスク側の壁に向かって礼拝が行われる、いわばインド版「嘆きの壁」である。

—Don't you think some groups like RSS make the relation worse?

No, we do nothing wrong. Pakistan has a big problem like terrorism.

—Do you think India and Pakistan can be friends?

Yes, if they want to.

—But you said Islam is violent.

Yes, some of them are. I don't know much about Islam but most Muslims in India are nice.

—Because they are originally Hindu?

Yes. They know they have Dharma.

—Then why do you want them to be "back" to Hindu when they are still nice as Muslims?

Because it is the natural way to live in this land. I don't want them to forget Dharma.

インタビューの途中で、違う初老の男性が事務所に現れた。その男性は RSS の制服を着ており、今朝シャーカーをしてきたと言う。D 氏にシャーカーに参加しているのか聞くと、「もう年だから」と笑って答えた。かれには娘と息子がおり、かれ以外の家族は RSS のメンバーではない。娘は IT 企業に勤務していて、日本に派遣されるかも知れないので日本語を勉強していたそうだ。かれは女性の社会進出に対して非常に積極的で、筆者が来年から就職することを伝えると、「これからは女性ももっと社会に貢献しなくてはならない」と述べた。息子は現在大学生で、「息子さんはシャーカーに参加しているか」と聞くと、「参加していない」と答えた。「シャーカーに参加するように勧めないのか」と聞くと、「RSS のメンバーでなくても、その運動をサポートする人間は沢山いるし、無理にシャーカーなどの行事に参加させることはない」との答えだった。

D 氏は英語も堪能で、物静かな紳士だった。かれのいう非暴力と寛容、そして女性の社会進出への理解は一見先進的である。しかし、非暴力は、ガンジーの「非暴力が卑怯の別名になってはならない」という考えを逆手にとり、ムスリムがテロをするからその自衛のために戦う必要があるとして、ときに暴力を肯定する。また、女性の社会進出に関しては、ヒンドゥー・ナショナリストの中ではカーリー (Kali) などのヒンドゥーの女神の猛々しさを賞賛する形でしばしば肯定され、女性のベール着用や外出の制限などの規則を持つイスラーム教¹⁶を批判する材料にされている。その点で、かれは特に従来のヒンドゥー・ナショナリストの総意からずれることはない。かれの中でのもっとも大きな矛盾は、カシミール問題やパキスタンとの紛争関係はすべて過去のことで、今はインド国内のムスリムとキリスト教徒をヒンドゥーとして受け入れると言いながら、アヨーディヤーやマトゥーラの話になると、「もともとヒンドゥーの聖地だった」と、歴史的な問題を持ち出すことである。

¹⁶ イスラーム教に基づくこのような規則については、イスラーム教圏内でもさまざまな違いがあり、一概にこのような規則がイスラーム的だとは断言できない。

またヒन्दゥーに戻りたいと思わない者はいないと発言からも、寛容からは程遠いヒन्दゥー至上主義的な考えが垣間見えた。

3-3. RSS デリー事務所のメンバー

別の日に E 氏へのインタビューを行った。E 氏は 60 年間 RSS のメンバーをしている。高齢のためか話がとびとびになることもあったが、訛りの強い英語で筆者の質問に丁寧に答えてくれた。インタビューの内容は主にパーティションについてである。

—Why did you join RSS?

I joined RSS because I lost my family in Partition. RSS is as my family.

—Do you mean you joined RSS in 1947?

Yes.

—What happened to your family?

I don't know much but they died.

—Could you tell me the details, please?

I was a little boy and living with my family in the city near Punjab. One day, my parents told me to go to Delhi because they heard that Partition was going to happen. They sent me to Delhi but it was very hard. There were many fights and many people died. My uncle told me my family died.

—Did you start to live with your uncle?

Yes, but there was nothing, so I joined RSS to support each other.

—What did you do as a member of RSS?

We supported each other.

—Did you join any fight or conflict against Muslims?

I don't remember much.

—What do you think about the relationship between India and Pakistan now?

I think it's good. Partition was horrible. It was very horrible.

—I read the book about Partition. I bought it in this store.

That's a nice book. That was horrible. I saw it with my own eyes.

—Do you feel hateful about Muslims?

No. Every thing got better than that time.

—Do you think all Hindus and Muslims have to live together peacefully?

Yes, peace is the best thing.

—How do you make it peace? There is still problem among Hindu and Muslims.

We are children of one mother.

—Mother land of India?

Yes. We all are children of *Bharat Mata*¹⁷.

E氏は、高齢のためか、記憶があいまいになっている部分も多く、かれの生い立ちについては、その場にいた他のメンバーが補足説明することもあった。その一方で、パーティションに対して強い印象を持っており、たびたび質問の内容とは関係なく「あれはひどかった」と繰り返し、最終的に泣き出してしまったため、インタビューは途中で打ち切られた。かれはパーティションで起こったことを詳しく話すことはしなかったが、実際にパーティションを体験した人間にしか分からない深い傷を抱えていることが読み取れた。1947年に起きたこの大混乱については、推定死者数は20万人から200万人と諸説あるが、一般的に100万人前後の死者が出たとされる¹⁸。その混乱の中でRSSは少年たちを取り入れていった。パーティションを体験した者が、RSSのメンバーになることは実に理解し易い。自分の目の前で、多くのひとびとが死に、自身も死と向かい合わせで生きてきたE氏にとって、パーティションの悲劇そのものが、母なる大地をインドとパキスタンの2つの国家に分けた代償であり、*Bharat Mata*の片腕がもぎ取られた実感だったのだろう。パーティションの悲劇は、RSSのホームページの文章でも触れられるとおり、母なる大地に対する侮辱（もしくは陵辱）と捉え、分離の原因を作ったとされる当時の国民会議派やインド・ムスリム連盟への批判という形で、しばしばヒンドゥー・ナショナリストに利用される出来事のひとつである。ふたつに分かれた大地を再びひとつに戻すことが、ヒンドゥー・ナショナリストの理想のひとつでもある。しかし、E氏はそのような見解は示さなかった。かれは、パキスタンに対しても、国内のムスリムに対しても、敵対的な発言をすることはなかったし、憎しみを抱いている様子は見取れなかった。

4. 在日インド人のインド像

4-1. インド人コミュニティの幹部

江戸川インド人会は、1200人以上のメンバーを持つ、東京都江戸川区のインド人コミュニティである。もともとは、近くに住むインド人数人の相互扶助の輪だったものが、IT技術者を中心としたニューカマーの増加で都内でも有数のインド人コミュニティに成長した。コミュニティの構成員の宗教は、ムスリムが1名いるが、ほとんどがヒンドゥー教徒である。出身地については、IT関連企業や大学の多い南部出身者がここ5年で急増しており、職業もIT関連企業や証券会社が多く、大手町に勤務するインド人のベッドタウンとして西葛西が発展した経緯が伺えた。

江戸川インド人会の幹部A氏は、デリー出身で、8年前に来日し、インド料理店のマネージャーをしている。英語も日本語も堪能で、大学時代は歴史を専攻していた。江戸川イ

¹⁷ *Bharat Mata*は直訳でMother India「母なるインド」を意味する。

¹⁸ ブターリア 2002

インド人会では、インドの祭りなどのイベントの開催や、新しく日本にやってきたインド人のためのゲストハウスの管理などを行っている。特に大きなイベントとしては、ディワリ(Diwali)と呼ばれるヒンドゥー教の新年の祭を行うとのことだった。このコミュニティではヒンドゥー教の祭しか開催していないようである。その理由はインドで一番多いのはヒンドゥー教徒だからだと A 氏は説明した。コミュニティへの参加要件は特になく、インド人なら誰でもいつでも参加できる。「パキスタン人はどうか?」と聞くと、「インド人だけだ」との答えだった。

A 氏は個人的な質問に対して、色々な話をしてくれた。特にインドについての質問には積極的に話を展開させた。「さまざまな出身地のインド人とどのようにコミュニケーションをとるのか?」と聞くと、「自分は色々な地方に行ったことがあり、大抵の地方の言葉は話せる」と、さまざまな方言での挨拶を教えてくれた。言語、カレーの味、気候など、インドの多様性について言及した A 氏だが、「インドのどこが好きか?」という質問に、「文化」と答えたので、「インドはさまざまな文化があるか?」と聞いたところ、「共通した文化としてヒンドゥー文化がある」と答えた。また、別の会話で著者が「インドにはタミル等さまざまな民族がいるとされるが」と発言したところ、「タミル¹⁹もヒンドゥーだ」と強い調子で答えたことも印象的だった。A 氏の中では、さまざまな地方の文化、さまざまな宗教の存在は認識しているものの、「インド」全体としてはやはりヒンドゥーが代表的かつ包括的な文化の源になっていると捉えているようである。

また、A 氏は、インド人コミュニティを取りまとめる立場として、インド人がより生活しやすいように色々な整備を進めるべきだと考えている。例えば以下のやり取りは、かれが「インド人」をどう捉えているかがよく表れている。

I saw the article that Mr. X (江戸川インド人会の会長) said he needed Hindu temple in Nishikasai. Do you agree with him? If so, please tell me why you need Hindu temple, and how do you come off the plan?

—We want Hindu temple not only for Indians but for everyone who want to come and pray. We Indians believe in god very much for peace of mind and good relation with others.

You said that Indian Community of Edogawa had people from various areas in India. There are the differences of language and so on. What makes people unite?

—We all have one heart and very much love to our country. The difference of language is meaningless.

¹⁹ タミル人(ヒンドゥー教徒)は、インド南部からスリランカ北部に居住している。1970年代以降スリランカの多数派であるシンハラ人(仏教徒)と激しく対立しており、その2派の対立に親タミルのインド政府が介入した歴史的背景がある。

A氏がヒンドゥー寺院の必要性を訴え、「We Indians」という表現を用いたことは、かれが「インド人」全体をヒンドゥー文化の基盤のもとにあるものだと考えていることが伺える。インドにおけるヒンドゥー寺院は、日本における寺院や神社よりも、より日常生活と密接に存在するものであり、この発言のみで、かれが排他的なヒンドゥー至上主義者だとはいえない。実際に、インド国内でも、ヒンドゥー寺院にムスリムが訪れたり、逆にモスクにヒンドゥーが訪れたりすることがある。しかし、「We Indians」という言葉を用いて、宗教的な話をするのは、マジョリティとしての恵まれた境遇においてのみ可能だといえる。

コミュニティの構成員を団結させる要素としては「our country」つまり「インド」を挙げているが、上述の発言なども含めて、「インド＝ヒンドゥー」という見方が多く見られた。しかし、支持政党については国民会議派への支持とガンジーへの敬意を明言し、BJPについてはナンセンスと一蹴した。A氏によるとBJPを支持するのは貧困層であり、在東京インド人のほとんどは国民会議派を支持しているとのことである。

「インド＝ヒンドゥー」という図式は持ちつつも、決して反マイノリティ的でないA氏に、RSSについて質問をした。

What do you know about RSS?

—RSS is a very big organization. It's very famous in India.

Do you agree with the ideology of RSS?

—Yes. They try to help Hindu people.

Do you have friends in RSS?

—Yes. I used to belong to RSS when I was young.

What is your image of members of RSS?

—It was very easy to join RSS when I was a kid. There's nothing special about the members of RSS.

What is the difference between members of RSS and other people?

—There's no difference.

A氏は、12～13歳から5年間ほどデリーのRSSのシャーカーに参加していたという。学校が終わった後、夕方5時くらいから近所の公園に集まって独特の体操をしたり、ヒンドゥーの神々の話を聞いたり、ほぼ毎日参加していた。大学入学とともに忙しくなって参加しなくなった。かれによると、デリーにはいくつもRSSのシャーカーがあり、それに参加することは特別なことではないという。日本でのYMCAのようなものか、と聞くと「YMCAは有料だが、RSSはサービスで行っている」と、答えた。RSSではハイキングなども行っており、その場合RSS側がその費用を最低でも半額は負担するそうである。貧困層が多いインドにおいては、サービスで行われるこのようなレクリエーションは魅力的だといえる。

興味深いのはシャーカで行われる教育の内容だが、反ムスリム的な教育はないと A 氏は断言する。A 氏は「ヒンドゥーの大勢いる神様の話を教えてくれる」だけだとし、RSS がメディアで報道されているような危険な組織ではないことを強調する。そして、ひとびとに毛布を配ったり、無料で学校を開くなどのボランティア活動こそが RSS の本質であるとかれは主張する。A 氏は「デリーは急激な経済発展とともに仕事で忙しい人が増えているので、退職後に時間があるひとびとが RSS のボランティアに参加すべきだ」と述べ、RSS は慈善活動の場と位置づけているようだった。A 氏は以前のインタビューで BJP をナンセンスだと一蹴しているが、そのことについて聞くと、「高い理想を持っていても、実際に政治の場で権力を持つと駄目になる」として、BJP は RSS の理想を実現できなかったという見解を示した。

A 氏は、RSS に対して同調的な発言をしつつも、それがあくまでかれ個人の体験や考え方からきていることを再三述べた。かれはインド人コミュニティの幹部だが、自分の考え方をコミュニティ内の他のメンバーに押し付けるようなことはしていない。RSS へ同調する者はコミュニティ内では多いかという質問に関しては、そんなことは考えたこともないといった反応の後、「そういうことは個々人の問題だから、皆がそれぞれに考えることだ」と述べた。また、かれはグジャラートなどでの RSS のムスリムやキリスト教徒に対する排他的な運動については非常に否定的で、「デリーではそんなことはないが、グジャラートでは近年 RSS とムスリムが対立していて緊迫している」と、問題視していた。しかし、筆者がデリーの RSS 事務所で購入した”Paravatam (Home Coming) Why and How”を見せ、「この本の内容に同意するか」と聞くと、「この本には、ヒンドゥーが貧しい人にお金を払って『ヒンドゥー教徒になれ』と言うと書いてあるか？ムスリムやキリスト教徒は、貧しい人にお金を渡して改宗させるが、ヒンドゥーはそんなことはしない」と、強い調子で述べた。また、アヨーディヤのバーブリー・マスジット破壊事件に関して聞くと、「あそこにはもともとラーマの寺院があったのを、ムガル帝国の皇帝が破壊したんだ」と、RSS のメンバー D 氏とまったく同様の返答をした。A 氏は大学で歴史を専攻しており、またジャワハルラール・ネルー著の”The Discovery of India”を愛読していることから、上述の主張が RSS での教育によってのみ形成されたものではないと考えられる。高等教育を受けたインドの一般市民が、このような主張をするのであれば、RSS の主張はインド国外から見られるよりも過激な主張ではなく、ある程度の共感をもってヒンドゥーのひとびとに受け入れられるものだということになる。

A 氏が RSS の主にボランティア活動に共感し、RSS は危険な集団ではないと発言することは、筆者にとって大きな驚きであったが、コミュニティの幹部であることと RSS に共感していることとは結びついておらず、コミュニティはあくまで生活上の利便性のために存在しているといえる。実際に、かれらが日本に住んでいる以上、過激なヒンドゥー・ナショナリストになる可能性は極めて低い。しかし、かれの中の「インド」像は、あくまでもヒンドゥスタンであり、外国で暮らす中で「インド」を代表する者として、ヒンドゥー的

な「インド」像を表象していることは明らかだった。A氏のような善良なインド国民がヒンドゥー的な要素の集合体を「インド」と認識することは、ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭を促す土壌になっているのではないだろうか。

4-2. 在日エリート

ICATは、関東地区最大規模のインド人コミュニティであり、その形態はインターネット上での情報発信である。メンバーは約9500人で、その内ムスリムは約3000人いる。江戸川インド人会と同様に、近年IT技術者を含むビジネスエリートが急増している。コミュニティ全体で会合を開くことはないが、コミュニティ内で、出身地、言語、宗教、思想等に基づいたコミュニティがいくつも構成されており、構成員同士が交流を図るのは、その一段階小さいコミュニティにおいてである。ICATの会長B氏(60代男性)は、A氏同様インドの祭り(主にDiwali)を開催することが大きな役割だと述べた。ICATは日本全国のインド人コミュニティと交流があり、祭りの規模も4000人近くの在日インド人が訪れるという大きなものである。

B氏は、ICATが開催する祭りには、ムスリムも仏教徒も皆気軽に参加できることを強調する。かれは再三インドの宗教的な多様性と寛容性を強調し、インド政府の公式見解から反れることはない。かれはケララの出身である。ケララは南部の州で、インド国内では例外的に、ヒンドゥー、ムスリム、キリスト教徒がほぼ同じ割合で居住している。そのため、B氏は「どの宗教の人も皆仲良く暮らしている」と強調する。B氏は、30年間日本で暮らしていて、いくつかの会社を経営している。B氏は日本のインド人コミュニティにおいて重要人物らしく、年に一度行われるPravasi Bharatiya Divasと呼ばれる在外インド人の会議に日本代表として参加している。そのため、インド政府と繋がりがあり、在日インド大使とも月に何度か会うという。まさに日本社会に対してもインド政府に対しても在日インド人を代表する立場にある。また、支持政党について聞くと、国民会議派への支持を明言した。BJPについて、その支持層は貧困層だと思うか聞くと、「支持政党は階層では決まらず、個人の判断だ。インド人は自分の意見を強く持っているため、家族の中でも支持政党が異なる場合がよくあるし、何を支持しようとも、それは個人の自由だ」と答えた。かれの発言は、インドの宗教的な多様性も視野に入れたもので、エリートならではのグローバルな見解が目立った。

これに対して、ICATに参加しているエリート層のF氏(20代男性)の見解は似ているようでやや異なる。以下、F氏にRSSに関するインタビューを行った。

What do you know about RSS?

— I know some people in RSS are radical.

Do you agree with the ideology of RSS?

— No. I don't think they can be the mainstream in India today.

Do you have friends in RSS?

—No.

What is your image of members of RSS?

—I think they are discontented in their lives and trying to make it better.

What is the difference between members of RSS and other people?

—Most of Indian people are very tolerant to others. RSS has good points but they don't understand India today.

F氏は外資系証券会社勤務で、アメリカに留学経験もあるエリートである。日本には2年前から住んでいる。かれはRSSにあまり関心を抱いていないということがインタビューの各所で見受けられた。F氏は、インド国内外でのRSSに関する報道はよく知っているが、A氏のような直接的な接点はない。かれは、RSSのヒンドゥー至上主義的な考え方を時代錯誤だと感じている。暴力事件が起こることに関しては、「日本ではあまり起こらない問題だが、インドではいまだにこういう問題を抱えている」と、祖国の不名誉を嘆くような口調で述べた。かれは、祖国への帰属意識については、「インドは豊かになりつつあるし、これから日本を越える大国になる。その時代を背負うのが自分だという自覚が強くある」と述べ、宗教や文化の面よりも、経済成長を続けるインドに対しての誇りを表した。その反面、アメリカや日本と比べて「衛生面の改善が進んでいない」ことや、「治安が悪い」ことを問題視していた。

かれは、B氏と同様に「インド」を世界の中のひとつの国として見ており、自身の経験から良い点と悪い点を客観的に挙げている。しかし、ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭に関しては、関心の薄さからか楽観的であり、「BJPが再び政権を握ることはない」とした上で、「RSSも都市では徐々に廃れてきている」と、ヒンドゥー・ナショナリズム運動の衰退を指摘した。筆者が「経済発展とともに社会が変化し、ダルマが失われつつあるという主張にはどう思うか」と聞くと、「ダルマはひとびとが自分の心の中に持っているもので、経済発展は関係ない。」と一蹴した。近年インドでは、中間層の間でヒンドゥー・ナショナリズムとは別の「ニューエイジ・グル」と呼ばれる新興宗教が人気を集めているが²⁰、F氏はこういったものには関心はないようである。新興宗教というものに対して、留学先のアメリカであまりよくないものだというイメージを与えられたらしく、「何を信じようとひとの自由だが、自分は特にそういうものには興味がない」と断言した。

4-3. インド・ムスリム

ヒンドゥーのひとびとが語る「インド」像は、多様性は強調されるものの、「インド文化」と「ヒンドゥー文化」の混同がみられた。国家と文化・宗教を無意識に同一視することは、人口の約8割という圧倒的マジョリティの立場だからこそその現象だろう。かれらの「イン

²⁰ 中島 2006

ド」像は人口の約1割のインド・ムスリムから見た「インド」像と乖離しているのではないか。筆者はインド・ムスリムコミュニティのメンバーC氏（30代男性）にインタビュー調査を行った。

C氏の所属するコミュニティは、ICATに登録しているメンバーが自主的に構成したもので、ICAT会長もその存在を把握している小コミュニティである。かれらの活動は、モスクやムサッラーと一緒に礼拝に行ったり、家族連れで集まったり、同じムスリムとして生活上の利便性を求めてお互いに支えあうもので、前述の江戸川インド人会やICATと比較すると、仲良しグループといった様子である。

C氏は16、7年前に来日し、食料品店とレストランを兼ねた店を持っていて、そこでハラール（halal）の食品を販売している。レストランはインド料理屋だが、使用する食材や販売する食品のほとんどはパキスタン製のものだという。日本のスーパーで買い物をすると、食材がハラールかハラーム（haram）が分からないため、「インド出身者かに関わらずムスリムがよく店に訪れる。」他のインド出身者よりもムスリムとの交流の方が多いかと質問したところ、どちらとも交流はあり、ICATのネットワークを通じてできた同じコルカタ出身のヒンドゥーとは交流が深く、ヒンドゥーの祭りにも参加するとのことだった。

C氏は、インドではコルカタにしか住んだことはなく、インドについて「文化的・宗教的に多様性がある」といったものの、具体的なエピソードは話さなかった。ハラールのインド料理という点でインド・ムスリムの特殊性を感じたが、「インド」に対する帰属意識よりも、カルカタという特定の地域やムスリムコミュニティへの帰属意識が高い。また、インド・ムスリムという前述の2名と異なる立場だからか、「インド」を代表する立場として語る場面は少なかった。

支持政党について聞くと、会議派への支持を明言し、BJPについては「かれらはムスリムや他のマイノリティを尊重していない。」と強い口調になった。「インドへの帰属意識とイスラームへの帰属意識とどちらか強いか」と質問すると、「そのふたつは両立できる。私はインド人だしムスリムだ。その両立ができないと考える人がいることは悲しい」と答えた。「両立できないと考える人が周りにいるか」という質問には、「周りにいる人たちは皆友達だから理解があるし、差別は受けたことはない。しかし、インド＝ヒンドゥーだと思っている人が（インド人にも日本人にも）いることは確かだ。」と述べた。

What do you know about RSS?

—RSS is famous in India. They support BJP and BJP doesn't care about minorities.

Do you agree with the ideology of RSS?

—No. They are the bad point of India.

Do you have friends in RSS?

—No.

What is your image of members of RSS?

—They might have prejudice to Islam.

What is the difference between members of RSS and other people?

—I don't want you to think every one is like RSS. I have many friends and they are fine. RSS is special.

C氏は、RSSの攻撃の矛先となっているムスリムなので、RSSに関しては批判的である。かれらがムスリムに対してとる行動は「インドの悪い部分」だとして憤りをもっているようだった。C氏は、過去にRSSとの直接的な接触はない。かれはRSSに関する情報はマスメディアを通して得ており、RSSのメンバーと会ったことはないという。その点で、A氏のいうところのメディアを通して伝えられる過激な部分しか見ていないということになる。かれは、バーブリー・マシッド事件を挙げ、ヒンドゥー・ナショナリストの暴力的な点を批判した。かれは当時日本にいたため、インドにいる友人から電話でその事件を聞き、憤りを感じたという。「神聖な場所を破壊することは許されない。そのような野蛮な行為を、ラーマを理由に行うことはもっと許されない」と述べた。筆者が”Paravatam (Home Coming) Why and How”を見せると、「ヒンドゥーになりたい人はなればいいが、ムスリムであることに何の問題もない。このような本を読んでヒンドゥーになりたいとは思わない。大切なのはヒンドゥーかムスリムかではなく、自分が誰かということ」だと、批判的に述べた。

5. 結論

5-1. 「India」と「Hindustan」の交錯とそれぞれのインド像

RSSのD、E両氏は、RSSの公式見解のような過激な表現をすることはなく、ムスリムに対する敵愾心も持っていなかった。かれらの中にあるのは、ネイションとしての「インド=India」が、文化的な多様性を持った「インド=Hindustan」とイコールで結ばれるべきだという思いであり、パーティションなどの悲しい過去からの脱却の方法論を、ネイションとしての「India」とヒンドゥー的な考えである「*Bharat Mata*≡Hindustan」の合致に求めている。RSSに代表されるヒンドゥー・ナショナリストの行動は、その多くがヒンドゥーという普遍的な信仰やそれに基づいた文化を、ネイションの外枠に閉じ込めて議論することから成っている。「インド国民」はヒンドゥー的な考え(Dharma)に基づいて生活するべきというかれらの主張は、人為的に引かれた国境の内側で生活する人々に、偽造されたヒンドゥーの正統性を押し付ける。それが、ヒンドゥー・ナショナリストの特異な点であり、インド国内に住むマイノリティに対して排他的だと批判される理由である。特にD氏は、ムスリムやキリスト教徒の「再改宗」やヒンドゥーの聖地の「奪還」といったヒンドゥー・ナショナリスト特有の考え方に賛同しており、「India」と「Hindustan」の合致を推進するタイプだと考えられる。

在日インド人は、生活上の利便性のためではあるが、インド人コミュニティに所属している。かれらはコミュニティ内やコミュニティ間で交流することで、インド人が生きやすいような環境を整備している。かれらはそれぞれの価値観を持って、祖国「インド」を見ている。かれらの抱く「インド」の多くもまた、ネーションとしての「India」と宗教・文化圏としての「Hindustan」の混合物であり、その混合がマイノリティにとってはヒンドゥー・ナショナリズム台頭の土壌になっていると感じられるだろう。

RSS との比較に際して、在日インド人のひとびとはそれぞれの体験をもとに、さまざまな角度から RSS を語ってくれた。その中で、やはり「India」と「Hindustan」の混合がされている場合は、特に RSS に対して違和感なくその存在を受け入れているといえる。その混合に何も違和感がなく、マイノリティが感じる危機感に鈍感でいられることは、幸運にもマジョリティであるからだといえるだろう。特に A 氏はその傾向が顕著な例である。

F 氏は、現代インドのエリート層の価値観をある程度象徴している。かれは単に仕事の都合で日本に住んでいることだけでなく、留学経験を通じて、国際社会から見たネーションとしての「インド」像を持っている。かれが RSS にまったく共感を持っていないのは、RSS の主張に反対するというよりも、ヒンドゥー・ナショナリズム運動を軽視しているからである。かれの「インド」像は、ヒンドゥー・ナショナリズムに傾倒する可能性は低いが、コミュニナリズム問題そのものへの関心の薄さが目立ち、インドの社会的安定に寄与する可能性は低い。これも、A 氏と同様にマジョリティでかつエリートであることでの幸運な鈍感さといえる。

それに対して C 氏は、RSS への強い批判を展開した。それはかれが実際に RSS のヒンドゥー至上主義が蔓延することで、かれの祖国にかれやかれの家族の居場所がなくなるかもしれないという危機感があるからである。しかし、かれは単にムスリムだからヒンドゥー至上主義は許せないということだけではなく、RSS の排他的な姿勢が、神の名を語って表されることに憤りを感じている。かれ自身、ヒンドゥーの祭りに参加するなど、同じインド人のひとびととの交流を尊重している。それにも関わらず、ムスリムだというだけで非難的になってしまうことを問題視しているのである。興味深いのは、A 氏は「RSS メンバーと一般のひとびとの違いはない」と答えたのに対して、C 氏は「RSS は特別だ」と答えたことである。この違いは、それまでかれらが接してきたひとびとがどういうひとびとかということに関係するのはもちろんだが、それ以上にかれらの RSS への共感の度合いを如実に表している。

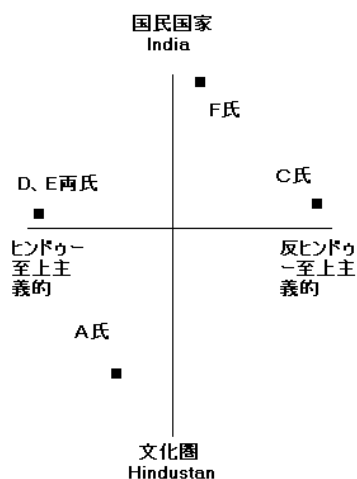


図 インド像のずれ

このような「India」と「Hindustan」の交錯から、かれらのインド像のずれが生まれている。何をもちてインドを語るか、インドはどうあるべきと思うか、かれらはそれぞれの

立場からさまざまな見方をしている。ひとりひとりの人間のインド像の中にこのような交錯が起こる背景には、さまざまなコミュニズム問題から読み取れる対立構図や、世俗主義が浸透しないほどの宗教とひとびとの密接な関係、そして圧倒的マジョリティの世俗国家の一員としてのマイノリティへの配慮の薄さがあるのである。

5-2. 多文化・多宗教「インド」への道

ヒンドゥーのひとびとは、自分たちがマジョリティであるために、ネーションとしての「India」とヒンドゥー文化圏としての「Hindustan」との間に差異を感じない。かれらが当然のように受け入れている「India」と「Hindustan」との結びつきが、マイノリティに対して寛容性を欠いた社会を生み出している。「Hindustan」で共有される文化や価値観が、人間の手によって線引きされた「India」に当てはめて考えられ、インド国民全体がヒンドゥー的であるはずだという寛容にはほど遠い主張にすりかえられる。ヒンドゥーのひとびとが持つ「インド」像が、ヒンドゥー・ナショナリストが唱えるヒンドゥー的な考えへの回帰に共感し、その規模の拡大と運動の盛り上がりに加担してしまう危険性は高いといえる。

日本人が日本を思うとき、それはネーションとしての日本だろうか。それとも文化圏としての日本だろうか。おそらくそのふたつは混合もしくは合致して考えられるかも知れない。しかし、現実には日本国が誕生したのは近代化の波が押し寄せた明治以降のことであり、それ以前は「日本人」という概念は存在しなかった。会ったこともない人間がお互いを仲間だと考えるには、共通点が必要である。それは言語だったり、宗教だったり、文化だったりする。日本の場合は、政府の強制的な教育によって、言語の統一が行われ、各地の風習が日本全体の文化として再編された。現在ではほとんどの日本に生まれ育ったひとびとが自分を日本人だと自然にアイデンティファイでき、そのアイデンティティを共有するひとびとを仲間だと考えているだろう。インドはその広大な領域に日本の10倍近い人口を抱えている。その中で、言語、文化、風習が異なるのは当然である。しかし、ヒンドゥー・ナショナリストは「われわれは皆ヒンドゥーだ」という。ムスリムやキリスト教徒も、インドで生まれ育った者は基本的にはヒンドゥーだという。広大な大地はすべてのヒンドゥーの母であり、その母から生まれた限りヒンドゥーなのだという。かれらの主張では、ヒンドゥーがネーションとしての「インド」を構成する必要絶対条件なのである。かれらのそのような排他的な思想は、決して許されるものではない。

コミュニズム問題は独立インドの宿命であるし、一朝一夕には解決できない問題である。しかし、ヒンドゥーという圧倒的マジョリティが、マイノリティに対しての理解力を深めなければ、悲劇は起こり続ける。インドでは圧倒的マジョリティであるヒンドゥーが、マイノリティに対する配慮や尊重を重んじない限り、ヒンドゥー・ナショナリズム運動の衰退は遠い先のことになるだろう。寛容の精神を重んじるヒンドゥーのひとびとが、そのことに気づくとき、インドは多宗教多文化国家として、新たな時代の先頭を切る存在にな

るだろう。

6. 参考文献

- 栗屋利江『イギリス支配とインド社会』山川出版、2005年
- アンダーソン、ベネディクト『比較の亡霊—ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社、2005年
- アンダーソン、ベネディクト『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年
- 伊藤融、中島岳志、永石信、他『インドのことがマンガで3時間でわかる本』関口真理編、アスカ出版社、2006年
- ウェーバー、マックス『ヒンドゥー教と仏教』東洋経済新報社、2002年
- 小川忠『原理主義とは何か アメリカ、中東から日本まで』講談社、2003年
- 小川忠『インド—多様性大国の最新事情』角川書店、2001年
- 小川忠『ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭—軌むインド』NTT出版、2000年
- 小熊英二『インド日記』新曜社、2004年
- 門倉貴史『手にとるようにわかるインド』かんき出版、2005年
- 工藤昭雄『インド—傷ついた文明』岩波書店、2002年
- ゲルナー、アーネスト『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年
- コーエン、スティーヴン・フィリップ『アメリカはなぜインドに注目するのか—台頭する大国インド』明石書店、2003年
- 古賀正則他編『移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ』東京大学出版会、2000年
- 小谷汪之『ラーム神話と牝牛』平凡社、1993年
- 小谷汪之『大地の子（プーミ・プトラ）—インドの近代における抵抗と背理』東京大学出版会、1986年
- 桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年
- 佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠『もっと知りたいインドI』弘文堂、1997年
- 佐藤宏『南アジア 政治・社会』アジア経済研究所、1991年
- 島田卓『図解インドのしくみ』中経出版、2001年
- ジャラル、アーイシャ『パキスタン独立』勁草書房、1999年
- ジャラル、ルネ『暴力と聖なるもの』法政大学出版局、1982年
- スミス、アントニー・D『選ばれた民—ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史』青木書店、2007年
- 関根康正・新谷尚紀編『排除する社会・受容する社会』吉川弘文館、2007年
- 関根康正『宗教紛争と差別の人類学—現代インドで<周辺>を<境界>に読み替える』世界思想社、2006年

- 津城寛文『＜公共宗教＞の光と影』春秋社、2005年
- デイ、A『印・パ分離への道ーあるイスラム思想家の悲劇』アジア経済研究所、1970年
- デュルケム、エミル『宗教生活の原初形態＜上・下＞』岩波文庫、1975年
- 関口真理・小磯千尋編著『ワールドカルチャーガイド9 インドー魅惑わくわく亜大陸』トラベルジャーナル社、1999年
- 長崎暢子『インド 国境を越えるナショナリズム (新世界事情)』岩波書店、2004年
- 中島岳志『インドの時代ー豊かさと苦悩の幕開け』新潮社、2006年
- 中島岳志『ナショナリズムと宗教ー現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』春風社、2005年
- 中野毅『宗教の復権ーグローバリゼーション・カルト論争・ナショナリズム』東京堂出版、2002年
- 中野毅『宗教とナショナリズム』世界思想社、1997年
- 西脇文昭『インド対パキスタン・核戦略で読む国際関係』講談社、1998年
- 日本国際問題研究所『南アジアの安全保障』日本評論社、2005年
- バーガー、ピーター・L『聖なる天蓋ー神聖世界の社会学』新曜社、1979年
- 橋本和也『ディアスポラと先住民ー民主主義・多文化主義とナショナリズム』世界思想社、2005年
- ハンチントン、サミュエル『文明の衝突と21世紀の日本』集英社、2000年
- 広瀬崇子『インド民主主義の変容』明石書店、2006年
- 広瀬崇子・山根聡・小田尚也『パキスタンを知るための60章』明石書店、2003年
- 藤井毅『歴史のなかのカースト 近代インドの＜自画像＞』岩波書店、2003年
- ブターリア、ウルワシー『沈黙の向こう側ーインド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声』明石書店、2002年
- ヘーダエートウツラ、ムハンマド『中世インドの神秘思想ーヒンドゥー・ムスリム交流史』刀水書房、1981年
- 宮原辰夫『イギリス支配とインド・ムスリム』成文堂、1998年
- 山下博司『ヒンドゥー教とインド社会』山川出版、1998年
- ユルゲンスマイヤー、M・K『ナショナリズムの世俗性と宗教性』玉川大学出版部、1995年
- Ludden, David. 2007. *Making India Hindu: Religion, Community, and the Politics of Democracy in India*. Oxford University Press.
- Rai, Mridu. 2004. *Hindu Rulers, Muslim Subjects – Islam, Rights and The History of Kashmir*. Hurst & Company.
- Seshadri, H. V. 2002. *The Tragic Story of Partition*. Sahitya Sindhu Prakashana.
- Jois, Rama. 2002. *Supreme Court Judgment on “Hindutva”: An Important Land Mark*. Suruchi Prakashan.

- Bajpai, Suresh Chandra and Barthawal, Harish Chandra. 2001. *R.S.S. At a Glance*. Suruchi Prakashan.
- Gottschalk, Peter. 2000. *Beyond Hindu and Muslim – Multiple Identity in Narratives from Village India*. Oxford University Press.
- A Swyamsevak. 2000. *The Story of The Sangh*. Suruchi Prakashan.
- Hansen, Thomas Blom, and Jaffrelot, Christophe. ed. 1999. *The Saffron Wave: Democracy and Hindu Nationalism in Modern India*. Oxford University Press.
- Jaffrelot, Christophe. 1999. *The Hindu Nationalist Movement in Indian Politics: 1925 to the 1990s*. Penguin Books.
- Madan, T. N. 1997. *Modern Myths, Locked Minds*. Oxford University Press.
- Eshwar, Raj. 1992. *Paravartan (Home Coming) Why and How*. Suruchi Prakashan.
- Jammu Kashmir Sahayata Samiti. 1991. *Genocide of Hindus in Kashmir*. Suruchi Prakashan.
- Rastogi, Gaurinath. *Our Kashmir*. Suruchi Prakashan
- 鷹山操「イスラム教徒が反発した国民歌の強制斉唱ーバンデマタラム論争」『世界週報』2006. 10
- 外川昌彦「シンクレティズム論再考ー南アジアの聖者信仰におけるヒンドゥー教とイスラーム」『宗教研究』2006. 6
- 福永正明「インドとヒンドゥーナショナリズムー繁栄の陰に根深い信仰」『世界週報』2006.5
- 大石高志「繋がり、広がり、逸脱ーインドにおけるムスリム皮革・食肉商工業者のネットワークとその恣意的読み替え」『現代思想』2006. 5
- 鷹山操「バンガロール揺るがす政治クーデターーIT州に世俗・ヒンズー連立政権生まれる」『世界週報』2006.3
- 保坂俊司「ヒンドゥー・イスラム融和思想とその現代的意義ーインド・イスラムにみる寛容思想の展開」『宗教研究』2004. 9
- 近藤光博「現代インドの対ムスリム偏見ーコミュニズム論から宗教研究の理論的再検討へ」『宗教研究』2004. 9
- アシス・ナンディ「インド大暴動 進む心の分離ーグジャラート州の民族浄化」『世界』2002. 7
- 関口真理「移民のエスニシティと活力：インド人のコミュニティ」『アジア遊学』2002.5
- 加賀谷寛「南アジアにおけるイスラーム」『環』2002. 4
- 井上貴子「よみがえる「愛国主義」」『国際政治』2001.5
- 佐藤宏「コミュニズムへの視点ーアヨーディヤー事件とインド政治研究」『アジア経済』2000. 11
- 宮原辰夫「インドにおけるムスリム・アイデンティティの問題ーインド・ムスリムの近代革命思想および運動しからの一考察」『慶應義塾大学大学院法学研究会論文集』1999年

- 近藤光博「ヒンドゥー・ナショナリズムと暴力」『南山宗教文化研究所研究所報』第8号、1998年
- アシス・ナンディ「インドの大国意識とヒンドゥー主義」『世界』1996.10
- 月村太郎「多民族国家における統合と解体—旧ユーゴスラヴィア解体過程を例として (ナショナリズムの現在<特集>)」『年報政治学』1994年
- ベネディクト・アンダーソン「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』1993.9
- デヴィッド・Y・H・ウー「中国国外で構築された中国国民のアイデンティティ」『思想』1993.1
- スタンレー・J・タンバイヤ「エスノナショナリズム - 政治と文化」『思想』1993.1
- 「(天声人語) 東京・江戸川区でインド人増加」『朝日新聞』2006.5
- 「(仕事人:209) インドから:6 ゲストハウス」『朝日新聞』2005.12
- 「(仕事人:208) インドから:5 ヒンディー語」『朝日新聞』2005.12
- 「(仕事人:204) インドから:1 西葛西に集う」『朝日新聞』2005.12
- 「東京・西葛西、息づくインド IT技術者続々、コミュニティー拡大」『朝日新聞』2005.3
- 「インターナショナルスクール下 文科省認可 (深川今昔9) /東京」『朝日新聞』2004.11
- 「インターナショナルスクール上 朝から算数 (深川今昔8) /東京」『朝日新聞』2004.11
- 「インド人会 祖国流、教育の場願う (葛西まち模様:15) /東京」『朝日新聞』2004.5
- 関口真理「アメリカ合衆国における南アジア系移民史」大石高志編『南アジア系移民：年表および時代区分』文部省特定領域研究・南アジア世界の構造変動とネットワーク、ディカッションペーパーNo.4、1999年
 - ◇ <http://homepage3.nifty.com/~mariammar-mar-nri1.htm#b> (最終閲覧日：2008年1月29日)
- 関口真理「アメリカのインド系コミュニティの最近の動向と第二世代のエスニック組織における「インド」の変容」平成11年度～13年度科学研究費補助金基礎研究(A)(2)研究成果報告書『環インド洋世界におけるネットワークと地域形成』(代表：弘末雅士)2002年
 - ◇ (<http://homepage3.nifty.com/~mariammar-mar-nrih.htm>) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- インド通信 website (<http://homepage3.nifty.com/~mariammar/india.htm>) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- India International School in Japan website (<http://iisjapan.com/IndianCommunityActivitiesTokyo> website: <http://www.manicat.org/main.html>) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- Network of Indian Professionals website (<http://www.NetIP.org/>) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- A.G. Noorani. *How secular is vande Mataram?* Frontline India's National Magazine website (<http://www.hinduonnet.com/fline/fl1601/16010940.htm>) (最終閲覧日：2008年

1月29日)

- Bharatiya Janata Party website (<http://www.bjp.org/vande.htm>) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- Rashtriya Swayamsevak Sangh website (http://www.rss.org/New_RSS/index.jsp) (最終閲覧日：2008年1月29日)
- 外務省 HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html>) (最終閲覧日：2008年1月29日)

謝辞

この論文を書くのにあたって、たくさんのひとにお世話になりました。末筆ですが、ここで感謝の意を書かせていただきます。

小熊英二先生

小熊先生の「インド日記」を拝読して、ぜひ先生のもとでヒンドゥー・ナショナリズム研究をしたいと希望して、ゼミに参加させていただきました。ゼミに参加してからの2年間、多くのアドバイスをいただき、研究というものの楽しさや難しさを教えていただきました。また、ゼミの外でも、小熊先生の講義や著作に触れることで、多くの知識を得たり、知的好奇心を掻き立てられたり、たくさんの刺激を得ました。ありがとうございました。

中島岳志先生

私がヒンドゥー・ナショナリズム問題を研究しようと考えたのは、中島先生の「ナショナリズムと宗教」を拝読したことからでした。インドでの現地調査にあたって、RSSの事務所に連れて行っていただいたり、現代インドの現状についてお話いただいたり、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

齋木尚子先生

インド研究を始めたきっかけは齋木先生のゼミでインド・パキスタン紛争を研究したことからでした。研究だけでなく、物事を考えるときは大局観と複眼的思考が大切であることを教えていただきました。ありがとうございました。

小熊研の皆さん

研究内容はまったく違うひとたちが集まっていましたが、皆さんそれぞれの研究への情熱が、自分の研究への意欲向上に繋がりました。発表の際には、「こうすればもっといい研究になる」と真剣に考えていただきました。ありがとうございました。

インタビューに協力してくれた方々

初めてのインタビュー調査でしたが、多くの方々が好意的に調査に協力してくださったおかげで、研究ができました。この論文に取り上げられなかった多くの会話や楽しい時間もふくめて、感謝したいと思います。ありがとうございました。